

緊急 トップインタビュー

宮城インバウンドDMO（丸森町）

代表理事 齊藤 良太さん(38)

新型コロナ禍での業況や「新しい様式」の方向性を各界トップに聞くシリーズ。今回は、外国人旅行者の誘致をけん引してきた観光地域づくり推進法人「宮城インバウンドDMO」(丸森町) 代表理事の齊藤良太さん(38)です。



一海外からの観光客がびたりと止まりました。

3月以降、インバウンドはほぼストップ。5年前に起業し、宮城・東北でのインバウンド事業のけん引役を自負してきましたが、完全に風前のともしびです。

一対応は。

コロナが終息し、インバウンドが戻る日は必ず来ると思います。それがいつかは見通せません。それまでの間、ビジネスの在り方を根本的に変えます。仕事（ワーク）と余暇（バケーション）を組み合わせた「ワーケーション」の普及に注力します。

「ワーケーション」に活路



一具体的には。

自分が共同代表となって25日に「宮城ワーケーション協議会」を立ち上げました。名誉会長は村井嘉浩知事。産官学連携で宮城・東北をワーケーションのトッププランナーにします。過密がリスクのコロナ禍では、適度な田舎で首都圏から好アクセスの宮城は先進地に行ける可能性があります。

一実現のポイントは。

新型コロナウイルス

ともに
乗り越えよう

首都圏をはじめ国内外に「ワーケーションと言えば宮城」と認知してもらうため、早く実例を生み出すことです。ハードの整備はもちろん、余暇メニューの充実も必要です。加えて重要なのが企業人材の育成機能。自然の豊かさはある意味、全国一緒なので、宮城の地場産業の現場をのぞけたり、東日本大震災や台風の被災地で防災や復興について学べたりする独自性を出し、差別化を図ります。

一将来性は。

ワーケーションは移住・定住者獲得の糸口です。自治体や地元企業がどれだけ迅速かつ情熱的に取り組めるかがポイントです。私は生まれ育った宮城のため、またけん引役となって汗をかきます。

企画・制作／河北新報社営業局